airiti Library

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

ノダの齎す結束性

「ノダ」引起的結合性

doi:10.6205/jpllat.30.201112.09

台灣日本語文學報, (30), 2011

作者/Author： 吉田妙子(Yoshida Taeko)

頁數/Page： 193-218

出版日期/Publication Date：2011/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.30.201112.09

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

「ノダ」引起的結合性

吉田妙子
政治大學日文系教授

摘要

所謂「好的文章」，其中一個必要條件就是，這篇文章是一篇「容易閱讀的文章」。而支持著「容易閱讀」這個要素的最重要的條件就是「文章的連貫感」、也就是所謂的「結合性」。「結合性」是藉由一定的語言形式而被呈現出來的。做為一個值得用語言學的觀點來做分析的東西，本文即以關於「ノ」「ノダ」「ノダッタ」之結合性的分析來做探討。

首先，格助詞ノ在產生名詞句的時候，有「體言吸附性」的這樣一個性質，也就是說在ノ的修飾處會要求是名詞。因此，比起用言謂語句，體言謂語句比較有一貫感以及安定感。

再者，如「シャツのボタンの取れちゃったの」這樣的句子，其句末的ノ，擁有「複製詞」的性質，意思是說以接在ノ前面的句子為基底，直接對句末的ノ做提示，保有「保存完整狀況的性質」。在補文標識ノ裡頭，相對於ノ所持有的「保存完整狀況的性質」，コト補文則持有「保存總括狀況的性質」。

所謂的「ノダ」句就是把「完整狀況」用複製詞承接，之後用ダ做為一個句末文體，所提出的句子。有效的使用「ノダ」的話，對於結合性的運用有很大的幫助。

因此，在文章最後的「ノダ」發揮著把之前的文章內容統合起來的功效，而「ノダッタ」則和「回想的タ」的功效相互作用著，可以說是一種給予文章一個終結的感覺。也就是說，把緊張感逐漸高漲的事態發展漸漸淡出的一種表現。

關鍵字：結合性（cohesion） ノダ文 體言謂語 格助詞ノ 複製詞

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

Cohesion of 'Noda' in Japanese

Yoshida Taeko
Professor, National Cheng-Chi University,Taiwan

Abstract

One of conditions of the so-called 'good writing' is the easiness to read and it largely depends on unity of writing, that is, cohesion in writing. Cohesion appears in a certain form of language, and it must be linguistically analyzed. This paper will analyze the cohesion of 'No', 'Noda' and 'Nodatta'.

First, the case particle 'No', as soon as it has made noun-phrase, demand the modified noun. We call it 'NP-adsorbity of No'. So NP-predicate gives more firmness and stability than VP-predicate.

Next, 'No' at the end of sentence, like "Shatsu no botann no torechatta no", has 'reservability of the whole situation'. This sort of 'No' is the so-called copy word that pastes a sentence placed before 'No' and presents it. This sort of 'No' also works as a complementizer. Besides 'No', 'Koto' works as a complementizer too. 'No' as a complementizer has 'reservability of the whole situation', but 'Koto' has 'reservability of the summarized situation'.

'Noda sentence' takes the reservability of the whole situation using the copy word 'No' (nominalization), and, adding 'Da', makes a complete sentence. If we use cleverly 'Noda', it will bring a considerable cohesion to writings. Therefore 'Noda' at the end of the writing gives a tension to the whole writing.

Otherwise 'Nodatta' at the end of the writing, for the sake of the past-tense 'Ta', makes readers ease the tension, as if a scene of movie is gradually fading out. Thus 'Nodatta' gives a feel of ending to writings.

Keywords : Cohesion, Noda-sentense, NP-predicate, copy word
The case particle No

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

ノダの齎す結束性

吉田妙子
政治大学日本語文学科教授

要旨

いわゆる「よい文章」の要件の一つは「読みやすい文章」である。「読みやすさ」を支える最も大きな要件は「文のまとまり感」、つまり「結束性」であり、「結束性」は一定の言語形式によって実現される。そのような言語学的な分析に耐えるものとして、本稿ではノ・ノダ・ノダッタの結束性についての分析を扱う。

まず、格助詞ノは名詞句を作ると、修飾先の名詞を求める「体言吸着性」を持つ。それ故、用言述語文よりも体言述語文の方がまとまり感・安定感がある。

また、「シャツのボタンの取れちゃったの」などの文の最後に位置するノは、ノに前接する文をペーストしてそのまま提示する「状況丸ごと保存性」を保持するコピー詞の性格を持つ。補文標識のノにおいても、ノが「状況丸ごと保存性」の性質を有するのに対し、コト補文は「状況総括保存性」を有する。

いわゆるノダ文はそのような「丸ごと状況」をコピー詞ノで受け、ダで文として差し出すものである。ノダは有効に用いると、結束性に大いに役に立つ。

それ故、文章末のノダはそれ以前の文章内容を締める役割を果たし、ノダッタは想起のタの効用とも相俟って、緊張感が高まった事態展開を徐々にフェイド・アウト（fade out）していくような終結感を与える表現と言える。

キーワード：結束性　ノダ文　体言述語　格助詞ノ　コピー詞

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

ノダの齎す結束性

吉田妙子
政治大学日本語文学科教授

1．はじめに

一般に「結束性」とは、「一定の言語形式によって実現され、文章全体を通して感じられるあるまとまり」である。結束性の研究は、欧米ではプラーグ学派のマテジウスから始まった概念で、テーマ（theme）とレーマ（rheme）[1]という概念で談話のまとまりということを述べている。その影響を受けてテキスト言語学を発達させ、言語学における結束性の研究を進めたHalliday & Hasan（1976）は、結束性を次のように定義している。（訳文筆者）

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會

> Cohesion occurs where the INTERPRETATION of some element in the discourse is dependent on that of another. The one PRESUPPOSES the other, in the sense that it cannot be effectively decoded except by recourse to it. When this happens, a relation of cohesion is set up, and the two elements, the presupposing and the presupposed, are thereby at least potentially integrated into a text.
> （結束性は、談話におけるある要素の「解釈」が他の要素に依存するという場合に発生する。一方が他方無しではよく解読できないという意味で、一方が他方を「前提」する。前提するものとされるものが―少なくとも潜在的に―テキストを構成する時、このテキストには結束性の関係が存在する。）

日本語の結束性の研究は、文章論として西洋のそれとは別個に展開されてきた。時枝（1950）は、それ以上分析不可能な単位にまで言語を分解する微分的な「原子論的単位」でなく、「質的統一体としての概念」という積分的な概念を提唱し、文章論のジャンルを確立

[1] マテジウスは、「テーマは既知のまたは少なくともそのコンテキストから知られる情報で、談話の起点となる要素、レーマは伝えるべき新情報を含んだ要素で、当事者達の知識を豊にする情報である。通常テーマとレーマはこの順序に述べられる。」（Firbas 1964、泉子・K・メイナード訳）と述べている。

airiti

した。それは時枝の大きな功績であるが、文章の本質論を出るものではなく、具体的な文章分析は後の永野（1972）、佐久間（1990）などの功績に待つところが大きかった。

しかし、筆者が見るに、これらの学者の方法はさまざまなジャンルの既存の作品（特に文学作品）の文章分析に終始しており、それは鑑賞のレベルでは役に立つものの、外国人が文章を書く時の生産的な活力源になるにはまだ数段階の隔たりがあるように感じられる。本稿では、鑑賞でなく文章を書く立場からの生産的な文章論の第一歩を試みたいと思うものである。それには、文章論に距離を置き、文章の結束性を作る言語形式に着目し、それが文章の結束性に与える影響を論じる必要があろう。それは、これまで境を接していた文法論と文章論の接点を見出すことにもなるかと思われる。

台灣日本語文學報30 台灣日本語文學會 2011年12月

その先駆は庵（2007）であろう。庵は「文法」を「運用論」から峻別し、語用論的観点が忍び込みやすかった従来の結束性の研究と明確に一線を画した。これは「文の核になる文法事項が文章全体の結束性に影響を及ぼす」という筆者の立場と一致するものである。

文章の結束性を支えるものとしては、運用論的には、①叙述開始のディスコース、②事件を予測させるディスコース、③事件の内容を理解させる語彙や表現の選び方、④叙述の終結を提示する文末表現、などが考えられる。このうち、文章全体の結束性に影響を与える文法事項としては、①指示詞[2]、②接続詞[3]、③ノダ文、④助詞、⑤体言文末の使用[4]、⑥省略、⑦読点[5]、⑧語順[6]、⑨語種[7]、などが考

---

[2] 言語学から指示詞を解明したものとしては、前述の庵（2007）がある。

[3] 接続詞に関しては、石黒（2008）などがある。

[4] 文末詞に関しては、西川（2009）などがある。

[5] 例えば、旧約聖書の詩篇72篇１節（共同訳）は、次のように表記されている。

A「神よ、あなたによる裁きを、王にあなたによる恵みの御業を、王の子にお授けください。」

これでは、読み手が構文を理解するのにずいぶん時間がかかるだろう。この読点どおりにポーズを置いて祈られたら、神様は一体誰に何を授けたらよいのか悩むに違いない。読点を次のように改めれば、理解は遙かにたやすくなろう。

B「神よ、あなたによる裁きを王に、あなたによる恵みの御業を王の子に、

airiti

えられる。本稿ではこのうち文章におけるノダ文の結束性に着目し、文章末に用いられるノダッタの段落統括性についても論じる。

また、庵（2007）は話し言葉・書き言葉を含めた文章全域の結束性に影響を与える文法事項として主にコソア指示詞を分析しているが、本稿では書き言葉（文章）におけるノダ文について論じ、話し言葉（談話）は副次的に、傍証が必要な際などに限って扱うことにする。筆者は以前、ノダを意味的側面から論じたことがある[8]。それをふまえ、本稿ではそのようなノダが齎す結束性について論じる。また、文の核になる文法事項ノダが文章全体の結束性にどのような影響を与えるかの研究を旨とし、文章論や修辞学には深入りしない。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

2．形式名詞ノの結束性

2.1 格助詞ノの「体言吸着性」

ノダに先んじて、本節ではまず形式名詞ノの結束性を見ていく。

上古・中古の時代では、主格はもともとガでなくノでマークされ、属格のノはガでマークされていた。ノが属格、ガが主格となったの

お授けください。」

上記のような文の場合、動詞「授ける」の必須項であるニ格を取る動詞句とヲ格を取る動詞句のペアをひとかたまりとして捉え、２組並べるというのが、誰でも考える読点の打ち方であろう。読点も文法規則に則って打たないと、時には意味不明の文ができることになる。読点の打ち方については、岡崎（1998）がある。

[6] 語順に関しては、佐伯（1983）がある。

[7] 次の文は、太宰治『走れメロス』の一節である。

Ａ「メロスはすぐに出発した。初夏、満天の星である。」

次は、『走れメロス』を日本語の初級学習者向けに書き換えた文[7]である。

Ｂ「メロスはすぐに出発した。夏の初め、空いっぱいの星が出ていた。」

Ａ文を音節数の多い和語が細かい石つぶてを連続して投げるのに喩えれば、Ｂ文は短いが情報量の多い漢語があたかも大砲をズドンと一発撃つかのような迫力がある。また、Ａ文は体言文であり、Ｂ文は用言文である。古来、和歌の世界で「体言止め」は余韻が深く読む人の印象に残りやすい技法とされていた。新聞の見出しのディスコースも、特に漢語サ変動詞の「する」の部分を省略するなど、体言で終わっている場合が多い。

[8] 吉田（1993）「原因・理由としての『のだ』文」（『台湾日本語文学報５』）

airiti

は院制時代以後とされている。現代語でも、「君が代」「亭主の好きな赤烏帽子」など、ガとノの逆マーク表現が見られる。このうち連体修飾節における主格は、ノでマークされる場合の方がガでマークされる場合より結束性が強く感じられるようである。

（1）a　おじいさん［の／が］生まれた朝に買ってきた時計さ

このノは主格だけでなく、対象格ヲに代わって用いられることも多い。従来からよく挙げられる「切符の切っていない方」という例、新しくは、台湾新幹線の車内販売メニューに「黒米とハトムギの煮込んだお粥」というのがあった。

（2）a　黒米とハトムギ［の／を］煮込んだお粥

つまり、「おじいさんの」「黒米とハトムギの」のノが属格性を帯びることになり、ノ格名詞句の連体修飾性が動詞「生まれた」「煮込んだ」を飛び越えて被修飾名詞の「朝」「お粥」を修飾する力を持ってくるわけである。それ故、

（1）b　おじいさん［の／が］生まれた爽やかな朝

（2）b　黒米とハトムギ［の／を］煮込んだおいしいお粥

など、被修飾名詞に他の連体修飾語を付しても非文にならない。しかし、連体修飾節中で主格や対象格をノでマークする場合は、主格名詞・対象格名詞の直後に動詞が接続していなければならない。

（1）c　おじいさん［*の／が］元気に生まれた朝

（2）c　黒米とハトムギ［*の／を］土鍋で長時間煮込んだお粥

などのように、副詞などの付加語が挿入されるとノはたちまち使えなくなり、その座をガに譲ることになる。つまり、文法格であるガとヲはノと交代可能なのであるが、ノ格名詞と動詞の間に述語を修飾する付加詞が挿入されるとノの修飾先が不明確になり、「おじいさんの元気？」「黒米とハトムギの土鍋？」などという構造的曖昧さが生じるからである。逆に言えばこれは、ノ格名詞は直後に現れる体言を修飾する力が強いということになろう。その証拠に、

（1）d　おじいさん［?の／が］オギャーと生まれた朝

（2）d　黒米とハトムギ［?の／を］おいしく煮込んだお粥

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2010年12月

airiti

など、体言性のない語を付加詞とすればいくらか抵抗は減るだろう。

即ち、「ノ格名詞句は最も近くに後置される体言を修飾する」という一般化が可能であると言える。これを、本稿では「ノの体言吸着性」と呼びたい。

2.2 コピー詞としてのノの「状況丸ごと保存性」

（3）a　私の帽子は、あの青いのです。

など、ノは具体物を表す代名詞としても用いられる[9]。この場合、「の」は「帽子」という明確な指示対象を持ち、

（3）b　私の帽子は、あの青い帽子です。

と言い換えられる。（修辞的には多少不恰好であるが。）しかし、

（4）a　冷蔵庫の中にビールが１缶残っていたのを取り出して、一息に飲み干した。

となると、「の」の指示対象は文脈上「ビール」であることが読み取れるものの、「の」を「ビール」と置き換えることは不可能である。

（4）b　*冷蔵庫の中にビールが１缶残っていたビールを取り出して、一息に飲み干した。

「の」を「ビール」と置き換えて統語的に整合させるには、連体修飾節の最も無標の「内の関係」の構文にして、

（4）c　冷蔵庫の中に~~ビールが~~１缶残っていたビールを取り出して、一息に飲み干した。

としなければならない。そうすると、（4）aの「の」は、（4）cの「ビール」と指示範囲が異なるものと考えなくてはならなくなる。

一般に、ノは前の文全体を受けるコピー詞と言われる。（4）cの「冷蔵庫の中に１缶残っていた」が「ビール」についての単なる説明に過ぎないのに対し、（4）aの「の」は「冷蔵庫の中にビールが１缶残っていた」という状況をそのまま保持し、さらに「ビール」

[9] 代名詞として用いられるノは、抽象物には使えない。学生の作文によく「*南部の天気は北部のよりずっと暑いです。」などの誤用が見られる。また、「*私の子供は女の子ですが、先生のはどちらですか。」など、尊敬の対象とすべき名詞もノで代用できない。

台灣日本語文學報30 台灣日本語文學會 2011年12月

airiti

を前景化する役割を果たしていると言える。「冷蔵庫の中にビールが1缶残っていたの」は、いわば、

（4）d　冷蔵庫の中にビールが1缶残っていたのだが、そのビールを取り出して、一息に飲み干した。

という、ビールを巡る状況を説明した前置き表現に相当すると考えられる。以下の例も、同様のことが言える。

（5）a　人なつっこいシンちゃんが近寄ってきたのを捕まえて、目出し帽を頭から被せた。（綾辻行人『どんどん橋、落ちた』）[10]

　　b　近寄ってきた人なつっこいシンちゃんを捕まえて、目出し帽を頭から被せた。

台灣日本語文學報30

ノのこのような「状況丸ごと保存性」は、（5）aが次のように言い換えられることからも覗える。

（5）c　人なつっこいシンちゃんが近寄ってきたところを捕まえて、目出し帽を頭から被せた。

台灣日本語文學會

「ところ」というのは、まさにある場面を瞬間的に捉えたものだからである[11]。

2011年12月

2.3 格助詞のノとコピー詞のノとテーマ化のノ

前節で示した（4）（5）では、格助詞ガをノに変えることができる。

（4）e　冷蔵庫の中にビールの1缶残っていたのを取り出して、一息に飲み干した。

（5）d　人なつっこいシンちゃんの近寄ってきたのを捕まえて、目出し帽を頭から被せた。

「ノ格名詞句は最も近くに後置される体言を修飾する」という「ノの体言吸着性」という前節での一般化により、主格名詞句「ビールの」「人なつっこいシンちゃんの」のノは自分の結びつくべき体言を

---

[10] （5）の例は、本稿修士課程3年の江俊賢君の修士論文「補文標識『ノ』『コト』の使い分けについて―主文述語の意味論的メカニズムの視点から―」（現在執筆中）の収集によるものである。

[11] 但し、（5）aは（5）cに比べてスピード感、瞬発感が落ちるようであるが。

airiti

追いかけ、「１缶残っていたの」「近寄ってきたの」のノに行き当たる。なんとノは修飾句を作り、被修飾名詞にもなるという二種の役割を果たすことができるというわけである。主格名詞をノに変えたおかげで、主格名詞のノとコピー詞のノが述語部分を挟み込むことになり、この連体修飾節の体言性をいっそう増している。つまり、結束性を増しているのである。

次はハガ文の連体修飾節である。

（６）a　スカートの裾のふくらんだのが欲しいんですが。

（７）a　シャツのボタンの取れちゃったのを直しといてよ。

これらの文は、それぞれ、

（６）b　裾がふくらんだスカートが欲しいんですが。

（７）b　ボタンが取れちゃったシャツを直しといてよ。

と、ノなしでも言えるところであるが、あえて３箇所にわざわざノを加えて（６）a、（７）aのようにする事情はそれぞれ次のようである。

（６）bは、まず主格「裾が」をノ格にして「裾のふくらんだスカート」にする。しかし、多くの服飾店ではスカートだけでなくズボン、ブラウス、セーターなど多様な衣類を置いているのが普通であるから、まず衣類の種類を限定し、それから細部を述べるという意識が働く。そこで、上位概念の「スカート」がテーマ化されて前方に位置させられ、「スカートの」となる。つまり、「スカートの」の「の」はテーマ化のノ[12]、「裾の」の「の」は主格のノ、「ふくらんだの」の「の」は代名詞兼被修飾名詞のノ、ということになる。

（７）aは構文形成の事情が違う。この場合注意しなくてはならないのは、（６）aの「スカート」は総称名詞だが（７）aの「シャツ」は個体名詞だということである。すなわち、（６）aは「数あるスカート類のうち、裾のふくらんだもの」ということで、「スカート」は上位概念、「裾のふくらんだの」は下位概念である。これに対して（７）aの「シャツ」は上位概念ではなく、「ボタンが取れちゃったシャツ」

[12] この場合、「スカートの」は「スカートの中で」の意味合いを持つ。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

とは「ボタンの取れている、まさにこのシャツ」という同定作業を行っているのである。したがって、（7）bのように「ボタンが取れちゃったシャツを直しといてよ。」と言われたら、直す部分はボタン付けでなく他の部分である、という読みも可能なのである。（「例のボタンの取れちゃったシャツ、袖がほつれたから直しといてよ。」のように。）即ち、（7）aと（7）bでは意味が違う。（7）aは本来、

（7）c　シャツのボタンが取れちゃったのを直しといてよ。

と、下線部の「の」によって「シャツのボタンが取れた」という状況を丸ごと保存し、さらに「ボタン」を前景化している。つまり、

（7）d　シャツのボタンが取れちゃったんだけど、ボタンを直しといてよ。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

と同値である。主格名詞句「ボタンが」をノ格にするのは、その後の作業である。つまり、「シャツの」の「の」は属格のノ、「ボタンの」の「の」は主格のノ、「取れちゃったの」の「の」はコピー詞兼被修飾名詞のノ、ということになる。

（6）aと（7）aの違いは、次のような言い換えで確認できる。下位概念を表すノは「やつ」で言い換えることができる。

（3）c　私の帽子は、あの青いやつです。

（6）c　スカートの裾のふくらんだやつが欲しいんですが。

（4）f　冷蔵庫の中にビールの1缶残っていたやつを取り出して、一息に飲み干した[13]。

しかし、下位概念を表さないノは「やつ」で言い換えられない。

（7）e　*シャツのボタンの取れちゃったやつを直しといてよ。

「スカート」と「裾のふくらんだの」は上位概念―下位概念の関係だが、「シャツ」と「ボタンの取れたの」は全体―部分の関係である。この場合は、「やつ」でなく「部分」で言い換え可能である。

（7）f　シャツのボタンの取れちゃった部分を直しといてよ。

[13] この場合の「ビール」は「もともと冷蔵庫にたくさんあったビールの中で1缶残っていたビール」であるから、この「の」は「やつ」で言い換えられよう。

airiti

このように、様々なレベルのノを用いることによって、ノの「体言癒着性」、ノによる「状況丸ごと保存性」が発動され、文の結束性は保持される。そして、このノの「体言吸着性」と「状況丸ごと保存性」が、ノダの結束性を形成してくるのである。

2.4 補文標識ノとコトにおける「状況丸ごと保存性」

本節では補文標識のノを検討し、それの性質を明らかにする上で必要な限り、同じく補文標識のコトを扱う。

前節ではノ節の表す「事態の状況丸ごと保存性」について述べた。補文標識のノにも、事態のこの「状況丸ごと保存性」は顕れる。

（8）a　太郎は、飛行機が飛んでいくのをずっと見ていた。（渡邉 2008 より）

　　b　太郎は、飛んでいく飛行機をずっと見ていた。

（8）b では、「太郎」の視点は飛行機に釘付けになっていると感じられるが、（8）a では「飛行機」が飛行機雲を伴ってゆっくりと空を横断する様を「太郎」が首を回しながらずっと後を追っている、という具体的な光景が目に浮かぶ。これは、まさにノが補文標識となっても有している「事態の状況丸ごと保存性」のゆえんであろう。

（9）a　太郎は、花子がピアノを弾くのを聞いた。

　　b　太郎は、花子がピアノを弾くことを聞いた。

（9）a では、同じく補文標識であるノが持つ「事態の状況丸ごと保存性」が発動して、「花子」がかわいらしく指を繰りながらポロンポロンとピアノを鳴らしている様を「太郎」が目を細めながら聞いている、などの具体的な状況が目に浮かぶ。しかし、（9）b ではそのような実在性は一切捨象され、「太郎は花子がピアノを弾くというニュースを聞いた」という読みにしかならない。

補文標識のノとコトについて、渡邉（2008）は、ノは「実在」、コトは「概念」を表すという一貫した説明をしている。そして、補文標識としてノ・コトのいずれを選ぶかは補文述語の性質による、とし、補文述語となる用言をいくつかに分類し、用言の種類によって認識論的分析を進める。例えば、（8）a、（9）a の「見る」「聞く」

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

などの知覚動詞は実際に対象を見たり聞いたりする現場性があるので「実在」を表し、ノしか取れないとする。しかし、次のような例は解説が二義的になる[14]。

(10)　授業がある［の／こと］を忘れていた。

(11)　彼は考える［の／こと］をやめた。(渡邉 2008 より)

(10)では、例えば臨時の補習授業があることをうっかり忘れていた学生があわてて教室に飛び込んできた場合は、「すみません。きょう授業があるのを忘れていました。」と教師に言い訳をするであろう。しかし、通常定期的に行なわれている授業を忘れて欠席するという天然ボケの学生に対して教師は、「彼はなんと、授業があることを自体を忘れていたんだよ。」と同僚教師にボヤくことであろう。

また(11)では、「彼」が物思いに耽っている最中に電話が鳴り、「彼」が思考を中止して電話に出る場合は「彼は考えるのをやめて、電話に向かった。」などと言うだろう。しかし、つまらないことをくよくよ思い悩む性癖のある鬱病患者などに対して医者は、「あなたはもう、考えることをやめなさい。」とアドバイスすることであろう。

このように考えると、ノよりもコトの方が補文で表される事態を客観的・超時的に捉えており、「事態の状況丸ごと保存性」が優れているような観がある。では、ノの「状況丸ごと保存性」とコトの「状況丸ごと保存性」にはどのような差異があるのだろうか。

長谷川（2010）は丸ごと認識論の立場から[15]、コトを「丸ごと一つの事態としてとらえ返されている（原文は下線部傍点）」とする[16]。

台灣日本語文學報30 2011年12月

---

[14] (10)の「忘れる」に対して、渡邉(2008)は「実在に対する働きかけしか表さない」場合（つまり、今までしていた知覚がなくなる場合）はノしか取れず、「経験的意味概念、もしくは手続き的概念を消失する行為を表す場合」はコトしか取れない、としている。また、(11)の「やめる」に対しては、「継続中の行為の停止と未来に予定していた行為の中止」の場合はノを取り、「日常化した行為の停止」の場合はコトを取る、と言う。

[15] 長谷川三千子氏は、埼玉大学の哲学の教授である。渡邉（2008）が言語を認識論的に説明しているのに対し、長谷川（2010）は認識論そのものの立場からコトとモノについて論じている。

[16] 例えば「まあ、みごとな桜！」は単に目の前の桜に感動しているのだが、「ま

airiti

それ故、「太郎は女たらしである」という主観的な判断であれ、「三角形の２辺の和は他の１辺より長い」という純粋に科学的な原理であれ、「ひとたび『こと』でくくってしまえば、ひとしく『事柄』として扱うことができる。」と言う。であれば、コトもノと同じく「状況丸ごと保存性」を体現するものではないか。

これを渡邉（2008）の「実在」と「概念」の説明原理と照合すると、ノとコトの「状況丸ごと保存性」が対比できるであろう。

(12) a　太郎は、父親が帰ってきた［の／こと］を知らなかった。
　　b　太郎は、地球が丸い［*の／こと］を知らなかった。

「父親が帰ってきた」ことは「太郎」の目や耳で確かめられるが、「地球が丸い」ことを実際に目撃したのは有史以来数人の宇宙飛行士だけであり、普通の人は概念しか持つことができない。

台灣日本語文學報30 2011年12月

「実在」とはあたかも目の前で展開されている事態を目撃しているような一回個別の出来事であり、「概念」とはそれが脱時間化・抽象化されて頭の中の引き出しにしまいこまれたものである。それゆえノ補文は「状況丸ごと保存性」と言えるのに対し、コト補文は「状況総括保存性」と言えよう。いわば、ノの「状況丸ごと保存性」が撮ったばかりのカラー写真であるのに対し、コトの「状況丸ごと保存性」は古ぼけて色褪せ所々変色したモノクロ写真と言えるだろう。

以上、コト補文との比較から、補文標識のノは補文内容の状況を丸ごと保存するコピー詞に相当することを明らかにした。このようなノの性質は、ノダの基本的な意味用法[17]、さらにはノダの結束性

あ、みごとな桜だこと」は桜に感動しつつもそれが「丸ごと一つの事態としてとらえ返されている」のだと言う。つまり、ただ即自的な反応であるだけでなく、過去に見た桜との比較などを通して反省・分析意識が働いた結果、やはり「みごとな桜だ」という最終的な評価に辿り着いた意識を表すわけである。それ故、腕を組んで歩いている男女を見て「まあ、仲がいいこと」などと言うのは単に冷やかしだけでなく、その事態を捉え返し、批評する言外の意味、「フン、人に見せつけて…」などのイヤミが付け加わってしまうことがある、というわけである。

[17] このようなノ補文の「状況丸ごと保存性」は、田野村（2002）の述べるノダの承前性・既定性を説明するものであろう。

airiti

につながるものである。

3．ノダの結束性

3.1 2文におけるノダの結束性

ノ補文は、さまざまな格において用いられる。

(13) a　太郎のやつ、授業をサボっているのがばれちまった。

b　太郎のやつ、授業をサボっているのを見られちまった。

c　太郎のやつ、授業をサボっているのは毎度のことだ。

d　太郎のやつ、授業をサボっているので、先生に叱られた。

これらのノ補文は、当然格に相応する述部を持つ。しかし、述部を持たないノ節、つまりそれ自体が述部になるノ節はどうだろうか。

(13) e　太郎のやつ、授業をサボっているのだ。

奥津（1993）では、ウナギ文の「Nだ」について、「『ダ』の前に来るものは焦点であり、『ダ』で代用される動詞は前提になっている」と言う。実在がペーストされてコピー詞ノで受けられた「授業をサボっている」はまさに事態の焦点であり、「ダ＝デアル」は「太郎」の事情がこのようなものでアルという動詞を代用していると言える。

田野村（2002）は、「『のダ』はあることがらの背後の事情を表す」とし、ノダ文が成立するにはあることがらが先行現象として聞き手に了解されていなければならないと言う[18]。そして、田野村はノダ文の特質として、承前性、披瀝性、既定性、特立性の４つ[19]を挙げている。つまり、ノダ文は言語化されていようといまいと、ある先行現象なしに孤立して用いることはできない、ということである。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

---

[18] 三上（1953）、林（1964）、佐治（1986）なども、ノダの本質を、ノによってペーストされる補文の部分をすでに成立しているものと前提し、それにダを付して差し出したものだとしている。

[19] 「承前性」とはノダ文が発せられる前提となる先行現象を有すること、「披瀝性」とはノダ文は必ず聞き手の知らない事態でなければならないこと、「既定性」はノダ文で表される事態が予め決定されたものであること、「特立性」とはノダ文の表す事態がそれ以外のものであり得ないという排他性、である。詳しくは、田野村（2002）及び吉田（1993）参照。

airiti

「Ｐダ。Ｑナノダ。」は、「Ｑという事情がある。その結果、Ｐという事態が起きている。」と言い換えられるのである。

では、このノダ文を使った表現とそうでない表現において、表現効果はいかなるものか。

(14) a　選手団が入場してきました。会場がどよめいています。

b　選手団が入場してきました。それで、会場がどよめいています。

c　会場がどよめいています。選手団が入場してきたのです。

ａは、「選手団が入場してきました」という先行事象と、それに続く結果の「会場がどよめいています」という後行事象をただ時間発生順に並べて叙述しているだけである。ｂは接続詞によって２文が接続されているゆえ、ａよりは結束性が感じられる。しかし、２文の前後を逆にして後置文にノダを使ったｃの場合、先に「会場がどよめいています」という目前の事実を述べ、聞き手の注意・緊張・問題意識を喚起した上で次に「選手団が入場してきたのです」と背後事情を説明して聞き手の緊張感を解く。ｂがいわば糊で２文を貼り付けた結束性であるのに対し、ｃは２文をシャッフルした結束性と言うことができよう。先行事象に対する背後事情の説明としては、状況を丸ごと保存しペーストしてピンナップするノ、それを文として差し出すダの組み合わさったノダが最も効果があると思われる。

ノダにの結束性は、先行文と後行文２文の結束性である[20]。

3.2 文章におけるノダとノダッタの統括性

3.2.1　ノダッタの文章統括効果

筆者は担当している作文の授業の一部で、４コマ漫画を用いて起承転結の文章展開を指導している。以下は、2008 年度政治大学日文

[20] 永野（1986）では文章の結束性について「連接」「連鎖」「統括」の３つの概念を用いている。その中の「統括」の文章例「いろいろなあいさつ」を 10 の文に分け、最後の第 10 段のノダが第５文から第６文を統括する、と述べている。しかし、筆者の考えでは、第 10 段のノダは直前の第９段と第 10 段を統括するだけで、全文の統括にはなっていないと感じられる。

台灣日本語文學報30 台灣日本語文學會 2011年12月

airiti

学科２年生の作文である。(無修正。出典は長谷川町子「サザエさん」)

［１コマ目］雪の降る季節になりました。ある日、一人の男の人が雪の中で歩いていました。寒すぎて、タクシーに乗ろうと思っていました。そこで、彼はある雪に覆われた車に「オーイ、しぶやまで」と声をかけました。
［２コマ目］ところが、車に近づいたら、なんとだめだねと運転手さんにことわられました。
［３コマ目］こらえがたい冬の寒さに運転手さんの冷たい態度を重ねて、この男の人は怒鳴りました。そして、彼は全力を使って、車を蹴りました。
［４コマ目］力いっぱいキックのもとで、車に覆う雪が剥がれました。すると、「警視庁」という三つの文字が現れました。なんと、それは警視庁の車のでした。男の人はびっくりして、ヤバイと思って、ダッシュして<u>逃げました</u>。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

以上の文章で結束性に関して問題が感じられるのは、最終段落である。これでは、単に場面の説明をしているに過ぎず、物語を読んでいるという気がしない。つまり、物語が終わったという終結感が感じられない。これは、ひとえに最後の下線部の部分にあると思われる。下線部を次のように修正すれば、終結感は増すはずである。

［４コマ目］力いっぱいのキックのもとで、車を覆っていた雪が落ちました。すると、車体に「警視庁」という三つの文字が現れました。なんと、それは警視庁の車だったのです。男の人はびっくりして、ヤバイと思って、ダッシュして<u>逃げたのでした</u>。(誤用修正済みの文)

では、このノダッタの終結感はどこから出てくるのだろうか。

3.2.2　文章末のノダとノダッタ

筆者は楊基銓氏の回顧録『台湾に生を享けて』(原文中国語、全507ページ) の日本語翻訳チェックを行う前の原稿を手に入れた。次の文は、日台国交断絶時のエピソードである。やや長くなるが、チェック前の文章とチェック後の文章を比べることから始めたい。

airiti

（A）（修正後の文章）[21]

日本国首相田中角栄の中国訪問以後、台湾と日本の関係は急激に悪化していたが、一九七二年九月二十九日、日本政府はついに中華人民共和国と国交を結び、同時に台湾―正確に言えば大陸からの亡命政権である中華民国―は、日本と外交関係を断絶した。そのために、本来経済、外交関係において密接な関係にあった両国が、正式な国交のない国家になったのである。当時の総統は蔣介石、行政院長は蔣経国、私が経済部次長に就任して三ヶ月後のことであった。

国交断絶の二日後、行政院政務委員李登輝が私に電話をかけてきて、

「実はきょう、日本大使館の宇山大使に昼食に招かれているんだ。場所は陽明山の大使官邸なんだが、どうだ、君も一緒に行かないか。」

と誘ってくれた。当日はたまたま午後に特別な公務がなかったので、私は一緒に行くことにした。

両国の国交断絶により日本大使館は閉鎖され、宇山大使は近く日本に帰国しなければならなくなった。そこで、彼は日頃親しくしていた李登輝と昼食を共にしながら、別れの挨拶をするとともに、正式の外交関係がない両国が将来いかにして実質関係を維持していくかについて、私的に意見を交換しようとしたのであった。私自身は宇山大使とは別に深い交誼があったわけではなく、ただ相伴のお客にすぎなかったから、二人の談話には口を挟まなかった。彼らの話は広範囲にわたっており、まったくあたりさわりのないものだった。たとえば、最近読んだ新書の読後感などで、別に敏感な政治問題には言及していなかったのである。むろん、二人とも突然に発生した国交断絶には深く遺憾の気持を抱いていたのではあろうが。

大使官邸には二時間ほどいた。食事を終えて経済部に戻ると、オフィスに孫部長がいた。私は陽明山に行く時、事前に孫部長に報告していなかったので、すぐに、

「李登輝政務委員に同行して、日本大使官邸で一緒に食事をしてきました。」

と報告した。

（B）（以下、修正前の文章。下線部は焦点箇所。）

①私の予想していないことに、平常近づきやすく、又話をする時も温順な孫部長は、私の報告を聞くと顔色を変え、声色も平常と違って荒荒しく、明かに私の軽挙に対する叱責であった。彼は、この様なことをどうして事前に報告してくれなかったと詰った後、「宇山大使は貴方がたの親密な朋友であるから、台湾を離れる前に貴方がたと互いに別れの挨拶を交わすのは当り前の

[21] この文章の焦点は、B、B’、B’’であり、Aの部分は話の全貌の理解のために記したもので、本稿のテーマとは直接関係ない。

airiti

ことだが、しかし両国が国交断絶したのは重大事であり、双方が直面している局面は非常に敏感である。この時に一緒に食事をすることが妥当かどうか、問題である。ましては食事の場所が適切でない場合は殊に問題だ。」と言った。孫部長は続いて「もし一緒に食事をする必要があれば、当然公共場所、例えば円山のグランドホテルでするべきである。それなのに貴方がたは国交断絶相手国の大使官邸へ行くとは甚だ当を得ないことだ。」と言った。②私は彼のこの話を聞いて、やはりこの事は確かに慎重を欠いたと思い付いたが、しかし孫部長の話はその場の叱責で終わり、この事は事もなく終わった。

これをノダを使って修正したのが次の文章である。

（B’）（以下、Bの修正文。下線部は焦点箇所。）
①ところが、孫部長は私の予期しなかった反応を示した。日ごろ温厚で親しみやすく、話し方も穏やかな孫部長が、私の話を聞くや顔色を変え、声を荒らげて私を叱責したのである。孫部長はまず私に向かって、
「こんな大切なことを、どうして事前に相談しなかったのだ。」
と詰めより、
「宇山大使は君たちの大切な友達だろうから、台湾を離れる前に君たちと別れの挨拶を交わすというのはわかる。だが、今の情勢と君の立場を考えてみろ。国交断絶という重大な事態に至って、両国とも非常に微妙な局面に直面しているんだぞ。こういう敏感な時期に、一緒に食事をすることがはたして適当かどうか。ちょっと考えたらわかりそうなものだ。」
孫部長はさらに続けて、
「第一、食事の場所が問題じゃないか。もし一緒に食事をする必要があるなら、当然公開の場でするべきだろう。例えば円山グランドホテルとか、ふさわしい場所はいくらでもあるだろうが。それを、こともあろうに国交断絶の相手国の大使官邸へ出向いていくとは、軽挙もはなはだしい。」
私は孫部長の叱責の言葉を聞いているうちに、やはり私の行為は慎重を欠いたものだったかもしれない、と思えてきた。②幸いに孫部長の叱責はその場で終わり、その後は何事もなくおさまったが、それにしても官員の立場とは難しいものだと、つくづく感じたのであった。

修正前のB①は、孫部長の人柄、孫部長からの叱責、筆者の驚きなど、1文にさまざまな情報が盛り沢山で、読者は情報の焦点を掴むのに時間がかかる。修正後のB’①は、まず前文で話者の予期しなかったことが発生したことを述べ、その後の事態展開の予測を与

台灣日本語文學報30 台灣日本語文學會 2011年12月

airiti

える。そして後文でその予想外の事態を説明し、ノダで差し出す。これは、前節(14)ｃと同様の修辞であり、前文・後文２文の結束性を齎すものである。

修正後のＢ’②には、問題が二つある。一つは、このノダに対する先行現象は何かということ、もう一つはこの文においてはノダッタと共にノダを使っても不自然にならないということである。

（Ｂ’’）

私は孫部長の叱責の言葉を聞いているうちに、やはり私の行為は慎重を欠いたものだったかもしれない、と思えてきた。②幸いに孫部長の叱責はその場で終わり、その後は何事もなくおさまったが、それにしても官員の立場とは難しいものだと、つくづく感じたのである。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

一つ目から検討しよう。時折、先行現象の見当たらないノダがあるようである。

(15) a　うちの子も来年は小学校なんですよ。(田野村 2002 より)

b　Ａ「血液型は、何型ですか。」

Ｂ「ＡＢ型なんですよ。」

(16)　（人のかばんを手に取って）わあ、重いんだなあ。(田野村 2002 より)

前節の(14)で見たように、「Ｐダ。Ｑナノダ。」は、「Ｑという事情がある。その結果、Ｐという事態が起きている。」と言い換えられるのであった。それならば、いきなり「Ｑナノダ。」と言われれば、聞き手は「だから何なのよ」と突っ込みを入れたくなるであろう。

(15) a の場合は、「子供が小学校に上がる」ということの意味――これからお金がかかること、ようやく母親の手が離れること、よくここまで育てたこと、など、子育てが一段落したことへの感慨――が話者と聞き手の間の共通認識として存在し、話者は聞き手にそのような共通感覚を持つことを求めていると考えられる。また、(15) ｂの場合は、これまた「ＡＢ型」についての共通認識――日本人には極めて少ないこと、輸血の際に誰からも血液がもらえること、血

airiti

液型占いでは「ＡＢ型はキチガイか天才」と言われていること、など――についての共通の感慨を持つことを期待している。

(16)の場合は、話者が何らかの理由で予め「かばん」に注目し、好奇心で持ち上げてみたら思いの外重かったので、「このかばんは重い」という「かばん」の属性を認識した。「Ｑ：このかばんは本来重いものなのだ。Ｐ：だから今、私は重いと感じている。」という意識経過が考えられる。

いずれにしろ、先行現象Ｐは発話を巡る状況、話者と聞き手の共通認識あるいは社会通念、或いは話者自身の対象属性に対する認識など、広範囲に及ぶと言える[22]。Ｂ’’②の文末が「のである」でも自然であるのは、前文の事態を通して感じてきた「官員の立場」というものに対する話者（この場合は筆者）の自己確認であろう。つまり、このノダは前文全体を統括する機能があると考えられる。

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

次に、二つ目の問題、終結の文がノダを取るか、ノダッタを取るか、という問題を考える。ここで考慮しなければならないことが二つある。一つは「文章末の叙述の型」であり、もう一つは「語りのパターン」[23]である。ここに、前節に挙げた学生の作文および（Ｂ’’）の文章末にノダを使った文を例文として再掲する。

(17)　私は孫部長の叱責の言葉を聞いているうちに、やはり私の行為は慎重を欠いたものだったかもしれない、と思えてきた。幸いに孫部長の叱責はその場で終わり、その後は何事もなくおさまったが、それにしても官員の立場とは難しいものだと、つくづく［感じたのである／感じたのであった］。[24]

---

[22] これを、田野村（2002）は「ノダの既定性によるもの」としている。

[23] 「語りの形式」については1970年代から様々に扱われていて未だに決定的な一般化がなされていないようであるが、本稿では以下に述べるような形での「語りのパターン」として扱う。「語りの形式」は文章論上の複雑な問題を含んでいるので、稿を改めて論ずることにする。

[24] 原文の修正文は「つくづく感じたものである。」であるが、「ものである」も「のであった」も回想という表現意図においては同値であると考え、「つく

airiti

(18)　［4コマ目］力いっぱいのキックのもとで、車を覆っていた雪が落ちました。すると、車体に「警視庁」という三つの文字が現れました。なんと、それは警視庁の車だったのです。男の人はびっくりして、ヤバイと思って、ダッシュして［*逃げたのです／逃げたのでした］。

(18)の文章の最後をノダッタからノダに変えると、あたかもまだあとに文章が続くような、何となく落ち着きの悪い印象を受ける。しかし、(17)は文章末がノダでも安定性は保たれている。

(17)と(18)の相違は、「語りのパターン」と「文章末の叙述の型」にある。(18)の文章末の文は事実叙述の文であるが、(17)のそれは総括的な感慨を述べる文である。これらを仮に、それぞれ「事実叙述型」「感慨露呈型」と呼んでおく。

台灣日本語文學報30 台灣日本語文學會 2011年12月

さらに、(17)は回顧録ということもあり、語りの内容は語り手自身の直接体験である。これを「回顧型」と呼んでおく。しかし(18)は、登場人物とは別の第三者の語り手が自分とは関係のない事柄を語る文章である。これを「物語型」と呼んでおく。即ち(17)の語りのパターンは「回顧型」で文章末叙述は「感慨露呈型」、(18)の語りのパターンは「物語型」で文章末叙述は「事実叙述型」となる。

「事実叙述型」の場合、「Pダ。Qナノダ。」の後文「Qナノダ。」がいきなり出現すれば、読者に「だから何なの？　だからどうだと言うの？」という情意を引き起こす。しかし、これは文章末であるから後がない。持ちあげられた気分が宙に浮いたまま、物語の終結を告げられることになる。それゆえ、読者は中途半端さを感じる。

一方、「感慨露呈型」の場合は事態に対する語り手の自己確認という形でノダが用いられるので、比較的に抵抗なく終結を迎えられる。

また、「物語型」では語り手はあくまで客観的・第三者的立場を取り、時には風刺的に、時には感情移入をしつつも事態をおもしろおかしく展開していくわけだから、結末も叙述的な文章が多くなる

づく感じたのであった。」として論を進めた。

airiti

ことが予想される。これに対して、第一人称主語の「回顧型」の場合は、一貫して語り手の主観によって語られるので、事態に対する語り手の総括叙述のノダが多く用いられることになる。(18)の文章末ノダに感じる抵抗感は、以上の事情によると思われる。

それでは、(17)におけるノダとノダッタの表現効果の差はどこにあるのだろうか。ノダッタのタは過去のテンスを表す。田野村(2002)は、ノダッタは「一定の種類の書き言葉でしか用いられない」とし[25]、その表現意図を「表現の視点が表現者の現在を離脱し、話題の状況の中に置かれている」としている。物語とは過去に起こった事柄を表現者の現在において語るものであり、基本的には過去形で語られる。しかし、最後にノダッタと来れば、読み手としてはいきなり話題の状況に引き戻される。読者はそれまで読んできたことが実は語り手の頭の中の回想であり、語り手の視点の転換の陥穽に嵌められたのであることを思い知らされ、物語の興奮が鎮められていく。これは、緊張感を高める役割をするノダとは真逆の効果であろう。

(17)においては、語り手が主人公であるため、「表現の視点」と「表現者の現在」が一致していることを、読者は最初から知っている。それゆえ、文章末にノダを用いても齟齬を感じないのである。

このように考えると、ノダは２文の間の緊密性を強め事態を焦点化することによって文章の結束性を生み出す一方、ノダッタはそれまで読んできた物語があたかも過去へと消えていくような弛緩作用を持つことによって、文章の終結感を生み出す。いわば、ノダが事態をズーム・アップ（zoom up）するという結束性を持つのに対し、ノダッタは物語をフェイド・アウト（fade out）するという結束性の効果と持つと言えるであろう。

[25] 但し、田野村（2002）も、話し言葉で「もっと勉強しておくんだった」（後悔）、「今日は試験があるんだった」（想起）などの例は挙げている。

台灣日本語文學報 30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

4．終わりに

以上、形式名詞のノの結束性、ノダの結束性、ノダッタの結束性を見てきた。ノの結束性は「体言吸着性」と「状況丸ごと保存性」を持つものであること、ノダの結束性は基本的には２文を統括するものであるが、文章末に置かれた場合は「文章末の叙述の型」と「語りのパターン」によっては文章全体を統括する機能も持ち得ること、ノダッタはそのテンスの故に文章末に置かれると文章全体を統括する機能を持つこと、以上を明らかにすることができたと思われる。

［参考文献］

庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版

石黒圭（2005）『よくわかる文章表現の技術Ⅲ　文法編』明治書院

石黒圭（2008）『文章は接続詞で決まる』光文社新書

石黒圭（2008）『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房

井上ひさし（1984）『私家版　日本語文法』新潮文庫

岡崎洋三（1988）『日本語とテンの打ち方』晩聲社

奥津敬一郎（1993）『「ボクハウナギダ」の文法―ダとノ―』くろしお出版

落合由治（2009）「新聞報道記事のテクスト論―その文章構成と表現技法の質的研究―」致良出版社

佐伯哲夫（1983）『語順と文法』関西大学出版部

佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』ひつじ書房

泉子・K・メイナード（2005）『談話分析の可能性』くろしお出版

田野村忠温（2002）『現代日本語の文法Ⅰ　「のだ」の意味と機能』和泉書院

寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤乾一（1990）『ケーススタディ　日本語の文章・談話』おうふう

時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月

airiti

永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店
名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能』くろしお出版
西川寛之（2009）『日本語文末詞の研究―文構成要素としての機能を中心に―』凡人社
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
長谷川三千子（2010）『日本語の哲学へ』ちくま新書
林大（1964）「ダとナノダ」森岡健二他編『講座現代語６　口語文法の問題点』明治書院
三上章（1972）『現代語法序説　シンタクスの試み』（復刻版）くろしお出版
吉田妙子（1993）「原因・理由としての「のだ」文」『台湾日本語文学報５』台湾日本語文学会
渡邉ゆかり（2008）『文補語標識「こと」「の」の意味的相違に関する研究』溪水社
范佩佩（2010）『形式名詞の「モノ」と「コト」―「モノ」と「コト」を含む述語句を中心に―』政治大学大学院修士論文
Halliday, M. A. K. & Hassan, R.（1976）“Cohesion in English” Longman
M. A. K. ハリデイ、ルカイヤ・ハサン著、安藤貞雄他訳（1997）『テクストはどのように構成されるか』ひつじ書房
［採集図書］
楊基銓（1999）『台湾に生を享けて』日本評論社

台灣日本語文學報30
©台灣日本語文學會
2011年12月

※2011年8月31日受理・誓約　2011年10月3日審査通過

airiti

References

Halliday,M.K. & Hassan,R.（1976）*Cohesion in English* .Longman. Trs.by Ando, S. & others. (1997) *Tekusuto wa donoyoni kosei sareruka*. Hitsujishobo, Japan.

Hasegawa,M.（2010）*Nihongo no Tetsugaku e* .Chikuma Shinsho, Japan

Iori,I.（2007）*Nihongo ni okeru tekisuto no kessokusei no kenkyu*. Kuroshioshuppan, Japan.

Maynard,S.K.（2005） *Danwa bunseki no kanosei*. Kuroshioshuppan, Japan.

Nagano,K.（1986）*Bunshoron sosetsu*. Asakurashoten, Japan.

Okutsu,K.（1993）*Boku wa unagi da no bunpo－Da to No－*. Kuroshioshuppan, Japan.

Tanomura,T.（2002）*Gendai nihongo bunpo I :'Noda'no imi to kino*. Izumishoin, Japan.

Teramura,H. & Sakuma,M. & Sugito,K. Hanzawa,K.（1990）*Kesu sutadi nihongo no bunsho: danwa*. Ofu, Japan.

Watanabe,Y.（2008）*Bun hogo hyoshiki 'Koto''No'no imiteki soi ni kansuru kenkyu*. Keisuisha, Japan.

台灣日本語文學報30
台灣日本語文學會
2011年12月